

幼老複合施設におけるみどりを素材とした幼児と高齢者の交流について

兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科 嶽山 洋志
 元兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科 佐野友梨恵
 兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科 美濃 伸之

1. はじめに

近年、核家族化や地域コミュニティの希薄化が進み、幼児らと高齢者の世代を越えた交流が減少している。その影響として、幼児らの社会性を育む機会が損なわれること、また高齢者の社会的な役割を果たす場が減少することなどが挙げられる¹⁾。このような動きに対し、多くの幼稚園や保育所は高齢者との交流を積極的に取り入れているが、交流の内容をみると幼児の歌や遊技を高齢者が鑑賞するという形態が最も多く、双方向による交流は少ないのが現状である。また交流の頻度も年に数回に留まっており日常的な交流でないことも課題とされる²⁾。

一方、ここ数年の間に「幼老複合施設」が増加、2施設が併設あるいは一体的に整備されていることから日常的な幼老の生活交流が展開されている。立松は「日常生活のなかでの自然な関わりが、お互いの存在を認め合い、気づかい合い、一緒にいることに違和感のない関係性を構築させていく」と述べており、生活交流の重要性を説いている³⁾。しかし既往研究の多くは施設内での交流を対象としたものであり、屋外での生活交流の報告は極めて少ない³⁻⁵⁾。

そこで本研究では、幼老複合施設を対象に、屋外でのみどりを素材とした幼児と高齢者の交流実態について明らかにするとともに、場面に応じた「高齢者」「幼児」「スタッフ」の3者の関係について考察することとした。

2. 研究方法

(1) 調査対象地の概要

本研究では、認可外保育施設「小さな保育園 虹のおうち」と小金井市指定認知症対応型通所介護施設「また明日デイホーム」が同一空間にある幼老複合施設（東京都小金井市）を対象とした。幼児の数は14名で1-2才児が全体の9割弱であった。一方の高齢者の登録者数は23人（ただし1日の定員は12名）で80代がその半数を占めている。

(2) 調査方法

本施設での幼老の交流実態（環境構成要素が交流に与える影響や高齢者の果たす役割など）を把握すべく、2012年5月から7月の計10日に参与観察を行った。対象とした屋外活動は5月に実施した予備調査から「公園遊び」「散歩」「栽培活動」に集約できることから、これら3つの活動に「屋内活動」を加えた4つの活動について観察することとした。観察の内容は図-1に示すように交流が発生した場面と交流のタイプとし、五感ごとに記録することとした。また「幼児」「高齢者」「スタッフ」の3者の交流のやり取りが把握できるよう、図-2に示すシートを用いて各主体の発

活動：公園遊び			交流のタイプ
五感	交流の場面	タイプ	幼児での交流でない
見る	アリの巣穴を見る	③	①幼児×幼児
	ダンゴムシを探す	①	②高齢者×高齢者
聴く			③スタッフ×幼児
触る	ア리를捕まえる	③	④スタッフ×高齢者
	遊具で遊ぶ	③ ⑥	⑤高齢者×幼児
	ドングリを拾う	①	⑥スタッフ×高齢者×幼児
嗅ぐ			
食べる			

図-1 交流が発生した場面と交流のタイプの記録例

日	2012年5月28日 天気:晴し	公園・散歩・栽培
概要	ア리를捕まえようとしていたら、アリの巣を発見	
ふたりの場の状況 行動に至る経緯	自分で探せる幼児A(男の子)を、高齢者Bに一緒に良く見てくれる。この日もAも黙って自分で探っていた。	
幼児の姿	高齢者の姿	スタッフの動き
A: 1歳男児 B: 2歳女児 A: 砂場のすぐ横で遊んでいると、アリを見つけた。触ろうと手を伸ばすが捕まえられぬ。 A: 四つん這いになって、アリの行く先を目で追っていくと、その先の巣穴が見つかった。「あ、あつ」 C: その様子を見て寄ってきて、「ありんこのお家」と声をかけた。	B: 女性 B: かがみで一緒にアリをみながら「アリさんだね」 B: 「ありんこのお家」	

図-2 交流中の3者のやり取りの記録例

話や行動を記録した。分析では「交流の延べ回数」「交流の種類」「幼老の交流の割合」といった視点で4者を比較するとともに、交流中のやりとりから、高齢者の果たす役割と幼児への効果を検証することとした。その他、幼老のみど

りを用いた交流に際し運営上注意すべき点について、2012年8月10日に施設長に対してヒアリングを行った。

3. 結果および考察

(1) 屋外での交流・みどりを素材とした交流の利点

表-1 に発生した交流の延べ回数と種数の比較を、図-7 に1時間あたりの交流の種数の比較を、図-8 に幼老の交流とそうでない交流の割合を示す。

まず幼老複合施設での10日間の調査のうち、実際に活動が行われたのは公園遊び8日、散歩7日、栽培活動5日、屋内活動10日であった。各交流の種類の代表的なものは次の通りである。発生した交流の延べ回数が77回の公園遊びは「ブランコなどの遊具で遊ぶ(発生した交流の回数:22回)」「砂場で遊ぶ(19回)」「虫(アリ・ダンゴムシ)を探す(16回)」が、発生した交流の延べ回数が39回の散歩では「コイやカメなど池の中の生き物を見る(6回)」「湧水で水遊びをする(6回)」が、発生した交流の延べ回数が35回の栽培活動では「野菜の生長をみる(8回)」「花壇の土のミミズ・ダンゴムシを探す(6回)」「水やりをする(6回)」が確認できた。一方の発生した交流の延べ回数が132回の屋内活動では「おもちゃで遊ぶ(40回)」「昼食やおやつを一緒にとる(20回)」が毎日行われていた(図-3~6 参照)。

次に交流の延べ回数を比較すると日数および時間が最も長い「屋内(132回)」が圧倒的に多いことがわかる。ところが交流の種類では屋内よりも「散歩(20種)」「栽培活動(13種)」が多く、さらに図-7 より1時間あたりの交流の種数を比較すると「散歩(5.7種)」「栽培活動(5.2種)」と「屋内活動(0.3種)」と比べて非常に多様な交流活動を行っていることが明らかとなった。これら2つの活動における交流の種数が多かった理由としては、屋外は屋内に比べ交流のきっかけとなる素材が豊富にあったことが要因と考えられる。例えば「散歩」であれば、7回実施したうちのコースが全部で5つと訪れる場所に変化があったこと、その中で動植物との出会いや、天気や時間での変化が屋外にはあったことが挙げられる。また「栽培活動」では植付けから栽培、収穫までの一連の工程を合同で行ったことで植物の移り変わりを一緒に経験できたことが交流を多様にしたものと考えられる。

さらに図-8 より「高齢者×幼児」の2者と「スタッフ×高齢者×幼児」の3者という幼老の交流と、それ以外のタイプの交流に分けたところ、幼老の交流は活動によって大きなばらつきはなく、どれも40~45%であった。すなわち屋外でも屋内(55%)同様に幼老の交流が行われていたといえる。一方、公園遊びの交流のタイプをみると、スタッフを介する交流が他の活動より12%と最も少なく、逆に幼老の2者による交流が29%と4つの活動の中で最も割合が高いことが明らかとなった。遊具があることに加え、公園内は見通しが良く車などからの安全が確保されていることなどから、スタッフは見守り役を果たしていることが伺える。



図-3 公園遊び



図-4 散歩



図-5 栽培活動



図-6 屋内活動

表-1 発生した交流の延べ回数と種数の比較

	公園遊び	散歩	栽培活動	屋内活動
実施された日数	8日	7日	5日	10日
活動の総時間	6時間	35時間	25時間	40時間
発生した交流の延べ回数	77回	39回	35回	132回
交流の種数	9種	20種	13種	12種

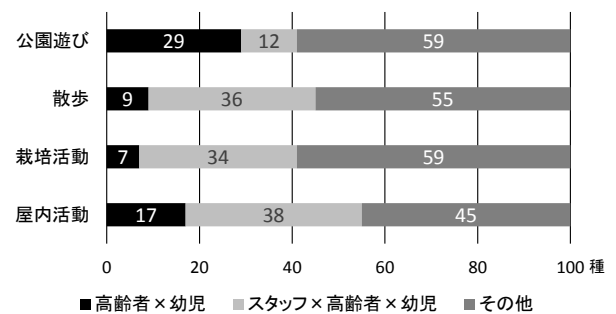


図-7 1時間あたりの交流の種数の比較

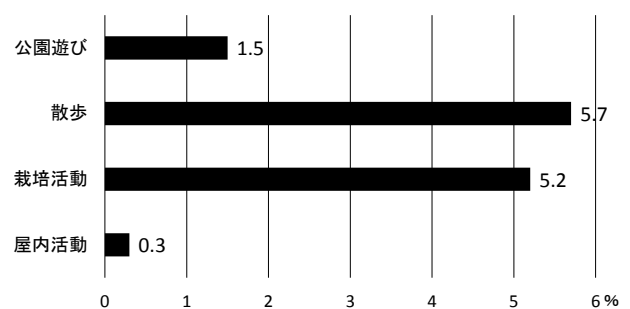


図-8 幼老の交流とそうでない交流の割合

(2) 高齢者の果たす役割と幼児への効果

本節では幼老の交流に関する詳細のやり取りから高齢者の果たす役割と幼児への効果について、各活動での事例をもとに考察する。

(I) 見守る (図-9,10 参照) …公園遊びと散歩

公園遊びの際にアリを見つけた幼児が「あっ、あっ」と見つけて喜んでいる様子を見て、「アリさん、いたね」と共感したり、別の幼児がアリの巣を見つけて「ありんこのお家」と発した言葉に「ありんこのお家だ」と応えたりするなど、幼児に高齢者がそっと寄り添う場面があった。また、散歩の際にアメンボ探しに夢中になり躓きかけた幼児を、「危ないよ」と高齢者が気遣う場面があった。これらのことから、普段は保育士が行っている見守り行動を、高齢者も同じように果たすことが可能であることがわかる。さらに上記の散歩の場面で「アメンボだ!」とそれに注目する言葉掛けを行うなど、動植物に目を向ける促しをスタッフは行うことが多い。その際、高齢者は危険がないか目を配るなど、スタッフの手助けの役割を果たしていることも伺えた。

(II) 教える・褒める (図-11 参照) …栽培活動

栽培活動の前、スタッフは幼児と高齢者に対して「技術指導」をしたり「収穫後の野菜の食べ方などについて話題づくりをし、イメージを膨らませること」をしたりと多くの役割を担っていた。しかし栽培活動が始まると、高齢者のAが慣れた手つきで黙々と植付け作業をされているのを見て、「Aさんがこんなに得意だなんて知らなかったわ」と驚き、「Bくんもスコップ持ってきて教えてもらおう」と指導をAに委ねた。そうするとAは「じゃあ一緒にやろうか。こうやってお山をつくって根っこにお水をあげるんだよ、やっごらん?」と幼児に苗の植え付けの手本を見せてあげた。このように当初はスタッフが指導を行っていたものの、栽培活動が始まると高齢者は自身が持つ豊富な知恵や知識を幼児に教える役割を果たすことができることがわかった。また野菜を自分で植えた幼児に高齢者が「上手だね」と褒める場面もあり、幼児にとっては学習効果だけでなく褒められることで自信を得るといった利点もあると言えるだろう。

4. まとめ—スタッフ×高齢者×幼児の交流特性—

図-12 にスタッフ×高齢者×幼児の交流特性を示す。最後に3つの屋外活動における3者の交流の特徴を整理してみたい。

まず公園遊びについて、公園内は見通しがいいこと、車などからの安全が確保されていることから、スタッフは高齢者と幼児から少し離れた場所で見守ることができ、結果、両者の自発的な「遊びを通じた交流」が生み出されていることがわかった。次に散歩について、スタッフは高齢者の「介助」のため、そばに必ず付いていることが公園遊びとの大きな違いである。この2者の距離が近いので高齢者はスタッフと一緒に幼児を見守るとともに、スタッフが幼児



図-9 公園遊びにおける幼老の交流



図-10 散歩における幼老の交流



図-11 栽培活動における幼老の交流

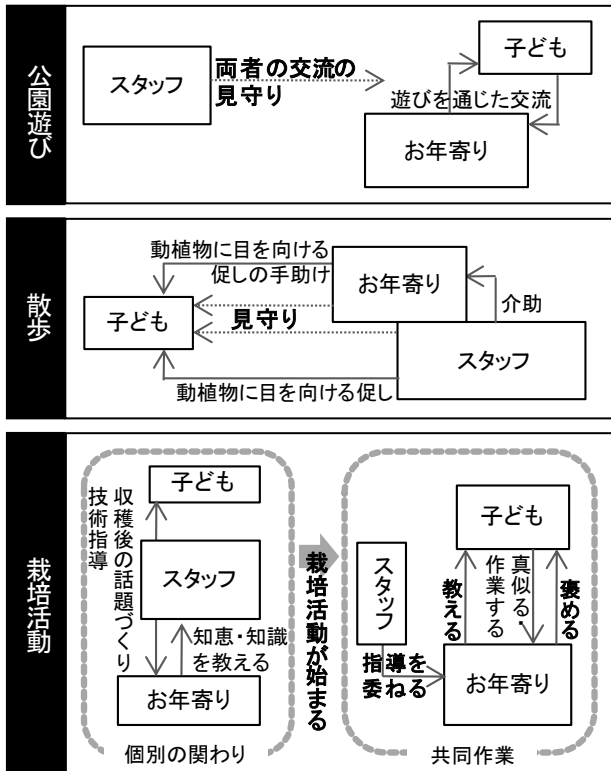


図-12 スタッフ×高齢者×幼児の交流特性

にする「動植物に目を向ける促し」の手助けをしていることが伺えた。最後に栽培活動について、栽培作業を始める前、スタッフは幼児、高齢者の双方に対して「技術指導」など、多くの役割を果たしていた。一方、実際の栽培作業が始まり菜園にみんなが集うと、スタッフは栽培作業が得意なお年寄りに指導の役割を委ねることで、子どもとお年寄りの交流が生まれることがわかった。

謝辞

本研究において調査の機会を提供して下さった NPO 法人地域の寄り合い所また明日の森田ご夫妻に感謝の意を表します。ありがとうございました。

参考文献

- 1) 林谷啓美・本庄美香 (2012) 高齢者と子どもの日常交流に関する現状とあり方、園田学園女子大学論文集 46、pp.69-87.
- 2) 關戸 (2006) 全国の幼稚園・保育所における幼児と高齢者のふれあいに関する実態調査、川崎医療福祉学会誌 15(2)、pp.655-663.
- 3) 立松麻衣子 (2008) 高齢者の役割作りとインタージェネレーションケアを行うための施設側の方策—高齢者と地域の相互関係の構築に関する研究—、日本家政学会誌 Vol.59、No.7、pp.503-515.
- 4) 北村安樹子 (2003) 幼老複合施設における異世代交流の取り組み(1)-福祉社会における幼老強制ケアの可能性-、Life Design REPORT、pp.4-15.

5) 北村安樹子 (2005) 幼老複合施設における異世代交流の取り組み(2)-通所介護施設と保育園の複合事例を中心に-、Life Design REPORT、pp.4-15.